

## 社会事業からみた津軽病院

松 本 郁 代

### はじめに

津軽病院は、津軽資生療院を継承した医療利用組合病院であり、現在の弘前市立病院の前身であった。元来、病院は治療を目的として開院されていることは言うまでもない。しかしながら、全国的に医療利用組合病院の役割を鑑みれば、その歴史的使命は、治療をはじめとして、生活問題への対応を含んだものとして発足し、存在してきた経緯がある（全国厚生農業連合会編 1978）。

本稿においては、その生活問題対応を含めて、津軽病院が置かれた地域において、スタッフがどのような問題に対峙しようとしたのかといった点について述べるものである。

その際、津軽病院には本院の開設に先立ち、分院が発足しており、診療所も含めた形で津軽病院とされているが、ここでは便宜的に本院のみを研究対象とする。そのことから、本稿において特別に断らない限り、津軽病院と記載すると津軽病院本院を指すこととする。

弘前市立病院が、2021（令和3）年度末をもって独立行政法人国立病院機構弘前病院と再編・統合することとなっており、閉院にともなって史資料の散逸や関係者への聞き取りに難儀することが予測できる。そのことから、津軽病院の歴史的使命やその担い手について、確認する必要がある。

では、これまでの津軽病院の歴史についての先行研究をまとめることとする。

津軽病院のみについて書かれた通史は、単行本としては、目下のところ存在していない。しかしながら、戦前からの産業組合によって設立された多くの医療利用組合病院については、先にも挙げた全国厚生農業協同組合連合会編（1965）『協同組合を中心とする農民医療運動史』同会発行に、全国のものが収められており、津軽病院も例外ではない。この本の編集後記の名簿には、医療利用組合に直接関わった人たちが、資料収集をはじめ

として、編集にも携わったことが記されている。

さらに、津軽病院については、次の二つの文献に記載されている。それは、ひとつは、青森県厚生農業協同組合連合会（1958）『組合病院史』同会発行のものである。ふたつめは、青森県下市立病院二十五年史編纂委員会編（1982）『青森県下市立病院二十五年史』同委員会発行に記載されている内容が、それにあたる。

前者には、現在の弘前市立病院になってからの初代院長である寺田清院長の回顧談が、座談会形式で納められている。また、両者には、歴代院長が写真入りで掲載されている。

しかしながら、医師についても、それぞれの時期に勤務したスタッフ全員を掲載しているわけではない。看護職をはじめとして、後者には、文献発行当時のスタッフ名が掲載されているが、それ以外の時期については、網羅することができない。

医師会側の文献としては、記念誌で年表の中に記載されている内容を確認することができる（記念誌編集委員会編 1997）。

また、看護職として、かつて弘前市立病院に勤務した人物が回想を掲載しているものがある。これは、東青病院の組合長である岡本正志の名前が出てくるが、津軽病院の組合長名が書かれておらず、また津軽病院の前身である病院名も、津軽資生療院と書かれていて、誤植かと思われる記述となっている（佐藤 1989：191）。

その後出されたものを見ると、本郷敏郎による青森県の農村医学会についての論文があり、東青病院をはじめとして、秋田や岩手における医療利用組合についても言及している。ただ、この本郷論文においては、津軽病院よりも東青病院に力点が置かれた記述になっている（本郷 1990・1992・1998）。

さらに、東青病院を中心として青森県内の医療利用組合について、組織体としての分析がなされているものにも、津軽病院のことが登場する（川

内 2011)。ここでは、青森県内での医療利用組合の全体像が判りやすく述べられているが、津軽病院については、紙幅が多くはない。

また、近年、医療利用組合についての研究においては、他の追随を許さないほどの充実した研究として認識できる、青木郁夫(2017)『医療利用組合運動と保健国策』高菖出版、が出された。この中では、「青森県下における医療利用組合統制のゆくえ」として、青森市内におかれた東青病院(現在：青森市民病院であり、目下、青森県立中央病院との合併を検討中)と合わせて津軽病院について触れられている。

以上のような先行研究を踏まえたうえで、本稿においては、津軽病院に関係した人物について取りあげながら、文献研究と聞き取りをすることによって、上記に示した課題に迫るものである。ただし、津軽病院の前身から現在の弘前市立病院までの通史を取り扱うということではなく、あくまでも社会事業との関連で、津軽病院当時の状況について、これまで使用されていなかった資料をとり上げながら述べるものである。

## 1 津軽病院に関わる組合員

### (1) 津軽病院黎明期における役員

『組合病院史』などを紐解くと、津軽病院の前身となるものは、津軽資生療院であることが判る。この病院は、言うまでもなく医療利用組合の経営によるものとして、正式名称を「有限責任利用組合資生療院」として発足した(青森県医療利用組合 1931: 17)。

この1931年に出された文献においては、設立年月日は、1930(昭和5)年10月7日となっている。また、沿革として、次のようにまとめられている部分がある。『青森県の医療組合概況』によると、名称としては、「有限責任購買利用組合」であり、設立年月日は、1930(昭和5)年10月7日で、先に挙げた文献と一致している。

この文献において、津軽病院の沿革として次のように書かれている。「晩近農山村ノ疲弊甚タシク中小商工業者亦不振ニ陥リ経済恐慌ヲ深刻化シ爲メニ医療事業ニアリテモ医療機関分布ノ不均衡ニ依リ庶民階級ヲシテ完全ニ治療ヲ受ケシムルコ

トヲ得サルノ状態ニアリタルヲ見テ同志相圖リ組合設立ノ計畫ヲ昭和五年七月七日弘前市、中津軽郡、南津軽郡ノ一市四十四町村ヲ區域トシ関係町村ノ意見ヲ徴シ津軽資生療院ト名稱ヲ附シ現組合長藤田重太郎外四千四百九十一名ヨリ認可申請同年十月七日認可ヲ得タリ」<sup>(1)</sup>と書かれている。

この4,191名というのは、組合員数のことであり、分院の組合員数も含んだ数字である。この統計は、1935(昭和10)年度のものをみると、7,646人の組合員となっており、当時の区域内の人口は245,368人、区域内戸数は40,889戸と示されている。また、組合員を職業別にみると、農業・商業・工業・その他の順に多くなっている(産業組合中央會 1936: 24)。このデータからみる限りにおいては、人口の3%ほどが組合員となり、その多くは農業を営んでいたということになる。

ところで、草創期のいきさつについては、『組合病院史』で、当時の役員であった兼平が証言をしており、これを見る限りにおいては、まず病院の位置については、仮の場所から富田町の近くに決めるべく移転をし、現在の弘前市立病院があるところに納まったということのようである(青森県厚生農業組合連合会 1958: 139)。

場所を確認するべく弘前市立図書館所蔵の1935(昭和10)年の弘前市内の地図を見ると、当時の第一大成小学校と津軽病院との間には田圃を現す地図記号が書かれており、小学校側の文献を見ても、やはり同じ敷地内に病院が後から造られたと書かれている(千葉 1955)。

この医療利用組合では、弘前市内だけではなく、周辺の郡部からも組合員を募集していることは、上記に挙げた文献にも出てくる。その募集について、地元の新聞紙上でも取り上げられている(『弘前新聞』1930年3月25日)。ここでは、組合員となり役員となった人物の中で、伊藤通と石戸谷軍三郎について次に言及しておこう。

伊藤は、上記の『組合病院史』では、稲垣村出身であると書かれている。稲垣村からは、津軽病院設立の刺激となった東青病院を創設した組合長の岡本正志を輩出した村である。伊藤が、この岡本を知らなかったとは言えず、弘前教会の会員として名が出てくる人物であると考えられる。

たしかに、クリスチャンと産業組合の病院とで

は、その繋がりを考えにくいとする向きもあるが、東京医療利用組合の旗振り役は、賀川豊彦であり、岩手支会の初代会長は、新渡戸稲造であることを考えれば、不自然ではない。

また、弘前教会においては、大正初めの凶作時における弘前市内でのチフスの流行によって被災した人たちへの支援を行った経験を鑑みれば、病に対しての備えや対処といったところでは、病院の設立や経営に関わることができる機会に役員という形で、経験を生かすということがあったとすれば、それは自然であるとも考えられよう。ちなみに、この救援については、凶作時に感染症が流行し、孤児も出たということが記録されており、病への対応のみならず、食料支援をはじめとして、感染症によって親を亡くした孤児救済についても、広く対応していた。

また、石戸谷については、第一大成小学校の訓導や校長を務めた人物で、石井十次が始めた岡山孤児院にも寄付をし、この孤児院の地方委員も務めている人物である（『岡山孤児院新報』54：4）。ちなみに岡山孤児院からは、弘前へも音楽幻燈隊が来て、孤児院の必要性を説いたことがあり、それに賛同した佐々木五三郎が、現在の弘前愛成園を創設したという歴史的事実があることは、よく知られている。

伊藤と石戸谷の関わりは、そういう点からも、地域の衛生状態や子どもたちの健康管理を考え合わせると、津軽病院への組合役員としての協力は、なかったとは言い難い。

さて、上記の人物以外に、『組合病院史』においては、成田清太郎が、「大將株」でと書かれていることから、この人物について言及しておく。彼は、現在弘前市に合併されているが、当時は清水村在住で県議会議員を勤めた人物であったと考えられる。周囲の役場に、彼が組合員募集の声をしているということで、中津軽郡の町村会で、彼の呼びかけに賛同した人がいた可能性がある。

また、藤田重太郎については、人名事典に登場する人物であり、県議会の議長も務めたことは、知られている（青森県人名事典編さん室編1969；東奥日報社編2002）。また、この人物の祖先で、百姓一揆の首謀者であった人物について、津川武一が小説を書いている（津川 1989）。

土田与惣市については、1933年発行の『青森縣人名録』では、次のように登場する。

「土田與惣市 45 弘前市議 弘前商工会議所常議員 雑貨商 富田町 電441」である。これをみると彼は、弘前市の市議会議員であって、電話を所有できるほどの人物であったということである。市議会議員を務めた人物も、組合創立時に賛同し、名を連ねていたということになる。

これらの情報をみると、津軽病院開設に奔走した人たちの中には、議員・教員・クリスチャンといった様々な職業をもち、医療機関の設置に必要を感じた人たちであったといえる。ただ、こうした様々な職業を持つという点について、違和感をもった人たちも存在していた。

それは、例えば、医師会側であり、医師が病院を経営するものだという見解があったことも、また事実である。弘前市で医師会長を務めた田澤多吉からは、開設以降時間が経過してからも、「元来産業組合ナルモノハ、産業発展ノ下ニ設立セラレタルモノナルベキニ、醫業上ニモ手ヲ展ブルニ至リ、遂ニ産業組合ナルモノヲ設立シ、本市ニ於テモ亦津軽病院ヲ設置シテ、醫界ノ注目ヲ惹クニ至レルハ昭和ノ初期ナリキ、コレ蓋シ産業上ニ資スルニアラズ」（田澤 1943、66-67）と書かれており、こうした医師会との拮抗関係は、当時としては、全国的なものでもあった。

## （2）組合員

組合員の中から、病院の役員を務める者がいたことは、上記でも述べたとおりである。病院創設後の1935（昭和10）年に刊行された文献によると、幹事の筆頭に伊藤通がおり、その次に石戸谷軍三郎と続いている。両者は、草創期から関わり、幹事としてこの時期に活躍していたということになる（川崎 1935：58）。

ここに記載されている人物をリストアップしておこう。

組合長理事	藤田重太郎
理事	兼平慶治
同	雨森良太
同	古川直作
同	齋藤芳讀



同 森 貞次郎  
同 中村芳一  
監事 伊藤 通  
同 石戸谷軍三郎  
他数名が含まれている。

では、1937（昭和12）年7月発行の文献においては、どのようになっているであろうか。これには、役員と医療スタッフが、同じ項目にかかっている（川崎文男 1937：81）が、次に挙げてみよう。

組合長 藤田重太郎  
専務理事 齋藤芳謨  
（本院内）統制部主任 野呂 悌  
同 事務員 木村淳一郎

組合員の活動として認識できることは、上記のような役員の活動に加えて、青森県の医療利用組合における標語の募集に応じて投稿していたということである。社会事業研究においても、当事者にあたる人物について、知ることは困難である場合が多いが、ここでは、組合員としての様子を見ることができる。

これから紹介する資料は、青森県の産業組合の情報誌『陸奥乃産業組合』第2巻第7号として発行されたものの中に挟まれた形で発見されたものである。ただし、標語が書かれた紙には、発行の期日が記載されていないことから、発行年の確定はできない。また、個人と住所が途中まで書かれていることから、部分的な写真撮影による紹介に留める（図1）。

これをみる限りにおいては、標語の投稿に応じた病院スタッフと組合員とが、存在しており、ひとりの組合員として、参加していたことが判る。病院スタッフによる標語の作成については、住所は記載されていない。

## 2 津軽病院におけるスタッフ

先行研究においては、津軽病院の院長名は示されているが、それ以外のスタッフについては、すべては書かれていない。それは、火事や建て替えなどの事情によって、書類が失われたことによる

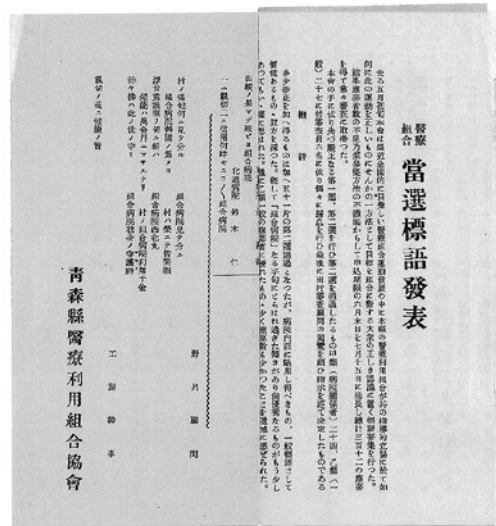


図1

ものと考えられるが、弘前市立病院への聞き取りによっても、戦前のものは残っていないとのことであった。これについては、今後の課題となる。

そうした事情から、本稿においては、スタッフの在籍期間について、一覧表を示すことは出来ず、判明した限りで氏名を記載しておく。

### （1）院長

これは、『組合病院史』にまとめられていることから、ここでは割愛する。

### （2）院長を含んだスタッフ

スタッフ全員について掘り起こすことは出来ないが、残された資料によって時系列でスタッフ名を挙げてみよう。

まず、図2に記載された1933（昭和8）年8月現在のものを書き写すと、次のようになる。

院長 福田邦治郎  
副院長 松岡精二  
医員 岸 秀男  
婦人科 今井修三  
耳鼻咽喉科 芳賀由男

では、これが次の年である1934（昭和9）に出された『陸奥乃産業組合』第2巻第7号では、どのように書かれているかということ、青森県におけ

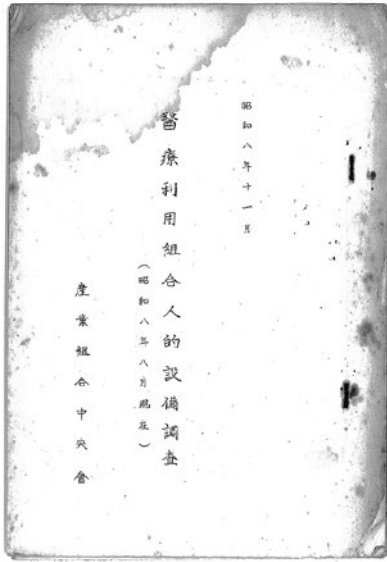


図2

る産業組合病院案内として、次のように出ている。

外科	院長	醫學博士	福田邦治郎
内科	副院長	醫學士	松岡 精二
		醫學士	岸 秀男
婦人科		醫學士	今井修三
レントゲン科		醫學博士	福田邦次郎
耳鼻咽喉科		醫學博士	芳賀由男
薬局		藥劑師	足立 正藏
		産 婆	荒木 あや

次に1935（昭和10）年発行の文献をみると、次のように書かれている、（川崎 1935：58）。

院長兼外科醫博	福田邦治郎
副院長兼内科	松岡 精二
医長兼産婦人科	今井 修三
薬局藥劑師	足立 正藏
同助手	鹽谷 清
同助手	松谷寅太郎
事務長	熊谷 精藏
事務員	對馬 武
同	野呂 悌
同	工藤 永市
同	成田 幸司

同	柴田 キヨ
同	成田 りつ

上記のスタッフは、1937（昭和12）年7月に出た文献によると、次のように替わっている（川崎 1937：81）。

津軽病院本院院長

兼外科醫長 醫學博士	奥田 征太郎
副院長兼内科医長 醫學士	松岡 精二
内科醫員 岩醫手學士	高松 功
耳鼻咽喉科長醫長 醫學士	篠田萬龜太
薬局藥劑師	足立 正藏
同助手	松谷寅太郎
事務主任	對馬 武
事務員	工藤 永市
同	成田 幸司
同	柴田 キヨ
同	山田 りつ

同様に、1940（昭和15）年7月刊行のものには、下記のように書かれている（柿崎 1940：141）。

組合長	藤田重太郎
専務理事	兼平 慶治
院長内科醫博	西 貞恒
醫員耳鼻咽喉科	天野 毅彦
醫員産科婦人科	清水 元雄
事務長	野呂 悌
事務主任	對馬 武
事務員	木村 淳一郎
同	柴田 キヨ
同	山田 りつ

この中で、同じ文献内に紹介が出てくるのは、西・天野・清水といったところである。西は、上記の文献には、「41 和歌山縣 醫博 元日大講師 所得税（一四五圓）多納者 徒町一一」と出ている。西は、大鰐分院長の時に、産業組合による経営の病院関係者として、「第一回醫局懇談會」に出席していることが1938年1月発行の『医療組合』第2巻第1号によって確認できるが、彼の発言は記録されていない。

天野は「36 従七 豊橋市 日大卒 醫博 海軍中尉 津軽病院醫長 富田町大野」と書かれている。海

軍中尉という肩書は、他のスタッフには見られないものであり、何かの意図があって、この肩書を持つ者をスタッフとして迎え入れたと考えることができる。

次に1942（昭和17）年8月刊行のものでは、下記のように書かれている。

組合長	藤田重太郎
専務理事	兼平 慶治
院長内科醫博	西 貞恒
議員外科	菊地 岩雄 <sup>(2)</sup>
議員	中里 武子
レントゲン技師	對馬 武
薬剤師	高谷 マサ
助手	松谷寅太郎
事務長	藤田 雄一
事務主任	浅瀬石秀次
事務員	木村淳一郎
同	石郷岡次郎
同	鳴海 秀雄
同	葛西ミツ子
同	木村 キヨ
同	木村 キミ
同	板垣 愛
同	川島 キミ
産婆 看護婦長	藤田 ヒデ
看護副長	須藤 タケ

ちなみに、菊池院長の時代に起きた戦後の火災については、『陸奥新報』紙上において、翌日の1959（昭和24）年4月15日に「出火御見舞御禮」として、次のような広告を載せている。

「昨十四日午前四時四十分当院便所附近より出火早朝にも不拘早速御駈付けお見舞い被下御芳志洵に有難く奉深謝候御騒がせ誠に申譯無御座候混雑に取紛れ御芳名御伺漏れも可有之就而不御詫無旁々御禮申上候

昭和二十四年四月十四日

弘前市上土手町

津軽病院 』

これは、病院長をはじめとして、役員ともども掲載した内容であると考えられる。新聞記事の内容はともかくとして、津軽病院側の対応として、

このようなことがなされていたことは、書き残す必要があろう。この火災についても新聞記事には、マスコミによる記事が書かれていることは言うまでもないが、客観的な事実として、病院側の対応を知ることのできる記述として挙げておく。

ところで、それぞれの人物については、資料の限界から、その詳細を辿ることが困難であるが、松岡について述べておく。

それは、松岡精二についてである。彼については、「縣下各市町村別現代知名人士録——弘前市」といった項目をみると登場する人物である（川崎1933：45）。これには、「和歌山縣35 津軽病院議員 富田富野」と書かれていることから、和歌山県出身であって、津軽病院で医師をしていたという情報になっていることが判る。また、1937（昭和12）年7月出版の人名録には、「和歌山縣 39 醫師 津軽病院副院長 偕行社通り」と出てくることから、まだこの段階では、弘前在住であったことが判る。

その後、松岡は津軽病院から東京に戻ったと思われるが、羽仁もと子が開設して友の会での座談会に出席をして発言をしている。では、彼はどのような発言をしていたのであろうか。

それは、数年間弘前にいたと言い、東北では、トラホームに雇っていても普通だという感覚があると発言し、さらに、それは、自分の子どもが通学していた小学校でも雇っている子どもたちが多いことや、ジフテリアの患者が多く発生していることなどを発言している。

トラホームについては、すでに弘前市内では、学校内に治療のための部署が設けられており、特別な治療所が設置されたことを石郷岡正男らが書いており、（小野 1975：26-31）新聞記事にも、当時は繰り返し掲載されている。一方のジフテリアについては、『青森縣報』でこの時期のものをみると、他のチフスや結核・赤痢といった伝染病の発生報告が出てくる中で、しばしばその発生が確認できる。ただし、ジフテリア自体が、寒冷な時期や場所において発症しやすい（鈴木 2005）ということへの対応として、住宅の暖房を考えるとといった生活改善についての発言は見当たらない。

この座談会には、羽仁説子も出席しており、彼女の母である羽仁もと子が、青森県八戸市出身で

あることから、興味深いものとなった可能性がある。羽仁もと子は、彼女自身が凶作をきっかけとして始めた東北セツルメントにおいて、農村の子どもたちの生活問題に対応するべく医師をその活動に迎え入れたことから、こうした座談会が開催されたことは、急に仕組まれたものであるとはいえないであろう。

さて、松岡はその後長野県にある佐久病院の初代院長となった人物であると考えられる（若月1999：31-38）。その確証を示す傍証が見当たらないが、佐久病院の集合写真の中に彼の姿がありその姿は戦前の座談会での写真と酷似している。

### （3）上記のリストにはない医師

上記のリストは、判明した範囲のスタッフについての情報である。これから記載する医師は、先行研究においても、人名録などにおいても、病院スタッフの一覧の中では確認をすることができなかった人物である。その人の氏名は、小宮山新一である。

彼本人が、存命中に書いた論文の最後に、編集に携わった人物が、経歴として津軽病院に勤務していたことを記載し、さらに彼にヒアリングをした人物にも、同じことを話しているということから確認できる。

では、この二つについて、どのように書かれているのかを確認しよう。

『医学史研究』24で、丸山博が小宮山を追悼し、まず、存命中に書かれた論文が示され、その末尾に出てくる「小宮山新一先生の略歴」（中田まゆみ編）として書かれている内容である。

「明治38年1月7日 長野県佐久郡  
八千穂（当時畑谷村）に生まれる

大正14年3月 松本高校（理科乙）  
卒

昭和12年3月 東大医学部卒、塩谷  
内科より津軽病院に派遣せらる。

13年9月 労研・研究員となり  
農村人口の調査を行ない生活改善  
と保健衛生の向上に寄与す。

16年4月 全国農村保健協会技  
師として全国の保健婦養成の任

に当る。

20年 長野県北信病院に院長と  
して赴任

23年 川崎市高津保健所の初代  
所長となる（以下、略）」

ここに書かれている塩谷内科について確認をすると、東京大学医学部分院の内科であって、塩谷不二雄が内科の科長をしていた時に入局したということのようである。小宮山の入局の年月日は、上記と一致し、退局の年月は、1937（昭和12）年10月となっていることから、本人の言と一致している（東京大学医学部附属病院分院閉院記念事業実行委員会 2001：9、19、244）。

また、同時に先に触れた松岡精二についても、この分院の医局に勤務していた記録となっている。時系列で並べると、松岡の後に、小宮が津軽病院に赴任したということになる。

ただ、彼が弘前に赴任するにあたっては、どんなきっかけであったのか、誰の紹介なのかといった点は、全くわからない。

この引用以外では、1968年の『医学史研究』30には、前年の1967年4月には、彼が鬼籍に入ったことが書かれ、あらためて彼の生涯について、かつての同僚である小浜泰子が聞き取りをした内容が記載されている。それを引用すると、次のように書かれている。

「昭和12年 東大分院、塩谷内科に入局・8月～  
9月は津軽病院の要請により赴任の  
準備として小児科で勉強した。

10月 弘前の津軽病院に着任。ここで受診  
してくる子供の中に栄養失調が多  
く、これを治すには農家の生活その  
ものを改善しなくてはならないこと  
をつよく感じた。

13年8月 医学部副手辞職

13年9月 学研の研究員となる。」

さらに、東大入学後に、社会医学研究会に入り、東京帝大セツルメントの活動に参加し、レジデントとしてセツルメントに泊まり込んだとも書かれている。

これらのことから、大学在学中にセツルメント



での経験をもち、貧困な人たちへの対応について学ぶ機会が実際にあって、その後に津軽病院に赴任しているということである。大学在学中のことについては、井口昌雄も証言をしている(川上 1969: 99-100)。

1933(昭和8)年には、小宮山の父親が、村長を辞して農協組合長をしながら農業をしていたと小宮山によって書かれている。農協が出来たのは、戦後であることから、これは産業組合のことかと思われる。少なくとも、産業組合や農業についての情報は、家族から入手できていたと考えられる。

以上のような小宮山についての情報がありながら、スタッフとして記録された津軽病院側の資料が、見つからない理由は、いくつかの点が考えられる。ひとつには、津軽病院が複数回火災に遭っているということである。

二つ目は、年度途中から津軽病院に勤務し、また年度途中で異動していることから、人名録編集の為の調査期間から外れた時期に勤務していたといったことから、記載されていない可能性があるということである。

もうひとつは、彼が人生の中で、繰り返し治安維持法違反で検挙されていたということである。組合長の藤田は、その後青森県の大政翼賛会の会長となることから、社会医学研究会やセツルメントといった史的唯物論に触れた人物が、この病院に勤務していたということ自体が、ころよく思われぬ事態であった可能性は否定できない。

それは推測の域を出ず、当時の思想について判る傍証としては、のちに妹の夫となった人物である田中清玄が、弘前高校出身者であり、当時は左翼思想の持ち主であったことである。小宮山の妹は、兄が津軽病院に勤務していた時には、病院長であったと証言している(田中・大須賀 102-104)。しかしながら、病院長であったということについては、傍証が見当たらないだけでなく、本人が語った履歴経歴の中には出てこない。この証言がなされている同じ文献には、小宮山についての説明として、「医師。長野生まれ。東大医学部卒。津軽病院時代に予防医学と保健婦の役割の重要性を認識。農村衛生の研究と改善に取り組む。四一年から全国農村保健協会技師として全国を遊説し保健婦養成にあたった。北信病院長、川崎中

央保健所長などを経て高津保健所長を十二年間つとめた。」(田中・大須賀 2008: 60)と書かれている。

ちなみに、小宮山は戦後、佐久病院の二代目院長になることを要請されているが、若月俊一を推薦し、本人は北信総合病院の院長となった。若月も小宮山も、東京帝大セツルメント医療部のメンバーであり、東大分院の医局に一時在籍した仲であったことを考え合わせると、これは偶然のものではないようである。

ちなみに、小宮山が北信総合病院で院長をしていた当時、病院展を開催したところ、多くの人が詰めかけ、床が抜けたと記録されている(長野県厚生農業協同組合連合会編:177)。病院展の何が、人を惹きつけたのかは、判らないが、地域の人たちにとって、何か惹きつける内容がそこにあったことは、間違いなからう。また佐久病院の初代院長は、松岡精二であり、ここでも彼らの繋がりを確認することができる。

ところで、問題は、津軽病院における小宮山の診療活動についてであるが、それを確認できる資料が見当たらない。ただ、先に示した小宮山本人が書いたものによると、1940(昭和15)年頃には、産業組合の育ての親と言われている黒川泰一から「県単位の病院・組合の事業などの連絡をするために産業組合にきてほしいとの要望があった。」と書かれている。さらに、農業組合病院に勤務している看護婦を対象に、青森を含めて地方における保健婦養成をおこなったという。このことは、黒川も同様のことを著書に書いている(黒川 1975)。

東京に戻ってからの調査研究では、この津軽病院での経験が生かされていたかどうかは、定かではない。しかしながら、次の論文をみることによって、単に関東地区の農村での調査研究のみで書かれてはいないと考えられる部分が出てくる。

それは、例えば、当時刊行されていた『児童保護』に執筆した論文である。この雑誌は、そもそも感化教育関係を中心に書かれてきた経緯がある。それとは少し分野の違いがあるが、「農村に於ける母性の勤労と乳幼児保護」と題して書かれた小宮山の論文が掲載されている。その中で、「従来一般に農村の乳児体重は生後五月頃までは大體標準



に達しており、乳児期以後となって発育が著しく遅れると云はれてゐた。」(小宮山 1939: 24)と書き、さらに彼が勤務していた労働科学研究所の農業労働研究所による神奈川県成瀬村での調査研究結果をふまえて、次のように記述している。

「農村婦人は自らの母乳不足に気附いてゐる者は尠い、注意深い農村の醫師や訪問看護婦に依つて初めて其の母乳不足が指摘される場合が尠くないのである。」(小宮山 1939: 25)と書かれている。

ここに書かれていることは、推測ではあるが、津軽病院に勤務していた際に診ていた子どもたちの様子を含めての認識でないとは言えず、従って、関東に戻ってからの調査研究のみで書かれているとは考え難いものがあり、さらに、これらを解決するには、農村婦人の労働を軽減する条件が整えられるべきだというのである。つまりは、乳幼児となる前の胎児からの健康管理を行うことなくして、栄養失調といった子どもたちの問題解決にはならないという認識から、生活に対応する必要があるということであった。

ところで、小宮山は、全医協の関係で、黒川泰一とも協力して、全国の産業組合系の病院に医学生を送り込んで農村の生活実態や医療の状況について理解をもってもらふ活動をしている。その体験記をまとめた文献において、小宮山自身も「戦時下農村保健問題」として、次のようなことをコメントしている。

「特に重要視すべことは、農村における疾病の感染経路が生活と非常に密接な関係を持つことで、家庭内感染が主要なる感染経路であるということである。」(全国協同保健組合協会編 1941、30)。ちなみに、この文献には、当時の津軽病院大鰐分院に來た医学生による報告が収められており、小宮山は彼らに対する指導的立場にあった。

さて、スタッフのリストに出ていた松岡精二とは、すれ違いの勤務時期であることから、松岡の紹介とも考えられる。

他の可能性としては、津川武一(川上 196: 283-297)<sup>(3)</sup>と東京帝大セツルメントで、同じセツラーとして活動したということがあり、津川が青森県出身であることから、この病院における活動を示唆したとも考えられる。しかしながら、津川の回想には、小宮山の名前は先輩として登場す

るが、彼との交流については、書かれていないことから、その事実は確認できない。(川上 1969: 286)。東京帝大セツルメントのセツルメントハウスは、弘前市出身である建築家の今和次郎が設計に参加しているが、<sup>(4)</sup>今と小宮山との接点は、確認できない。

小宮山は、検挙ののちに、復学するまでの時期が長く、卒業後は東京帝国大学附属病院分院に勤務している。この勤務については、入局と退職の時期は、彼の経歴を記載したもののが一致している。また、その医学雑誌の読者を想定すると、事実ではないことを記載することは考えにくいことから、津軽病院に実際に勤務していたと言える。

では、弘前から東京に戻った理由は定かではないが、少なくとも、農村地帯における当時の生活状況を、診療によって目の当たりにしたことは確実である。そこから、子どもたちの栄養失調といった実態を報告しているということになる。また、津軽病院と同じ敷地にあった第一大成小学校の子どもたちの様子を、通勤途上を含めて目の当たりにすることとなったであろうし、校医は医師会側の医師であったことから、健診以外のところで、診ることとなったと思われる。

## おわりに

以上、津軽病院草創期から断片的ではあるが、この地域における津軽病院による生活支援に関わる側面やそこから導き出された当時の生活状況を見ることができた。この津軽病院においては、貧困対策として開設されていた他の医療利用組合と同様に、単なる医療機関としての役割だけではなく、疾病の背景にある生活状況について対応する必要があることを認識したスタッフが存在し、その実現に向けて、努力された可能性があることが判る。これがまさしく、津軽病院の歴史的使命でもあった。

ところで、小宮山新一が勤務していた労働科学研究所は、研究所の成立状況を見ると、そもそも岡山孤児院の協力者であった大原孫三郎が始めた研究所である。小宮山は、労働科学研究所における更なる調査の中で、それまでの津軽病院での経験を科学化し、労働を含めた生活そのもののへの

改善なくしては、疾病へのアプローチをすることが困難であると考えた可能性がある。それは、津軽病院という医療から社会事業に取り組んだ集団の経験を吸収したものであったともいえよう。

今後は、戦時下における生活問題への対応を含め、今回明らかに出来なかったスタッフについても、みるものが課題となる。

最後に、今回、弘前市立図書館の司書の皆様に大変お世話になったことを申し添える。

## 註

- (1)『青森県の医療利用組合概況』津軽病院以外についても詳しく書かれている。
- (2)ここに書かれている菊地は、菊に地面の地となっているが、彼は大鰐から弘前市内の菊池薬店の菊池家に養子として入っていることから、これは誤植である。このことは、泉嶺(1993)『弘前高校物語』北方新社にも書かれており、現在の菊池薬店会長に聞き取りをした。
- (3)この証言には、津川による太宰治についてのものが含まれている。
- (4)東京帝大セツルメントの実際的设计者は、今の弟子にあたる人物で、三浦元秀である(福島 1993: 201)。

## 文献

- 相澤文蔵著・弘前学院大学出版委員会編(2003)『津軽を拓いた人々——津軽の近代化とキリスト教——』弘前学院
- 青森県厚生農業協同組合連合会(1958)『組合病院史』同会発行
- 青森県医療利用組合(1931)『青森県の医療組合概況』
- 青森県人名事典編さん委員会編(1969)『青森県人名大事典』東奥日報社
- 千葉寿雄(1955)『弘前市立第一大成小学校創立七十年記念誌『大成』雨森良太(創立七十年記念事業協賛会長)
- 千葉寿雄(1984)『大成百年史』津軽書房
- 福島正夫(1993)『福島正夫著作集第7巻』勁草書房
- 本郷敏郎(1990)「青森、岩手、秋田3県における1930年代医療組合設立の態様」『地域総合文化研究所紀要』2、70-96
- (1992)「戦後の公的機関開設に見る青森、岩手、秋田3県の態様」『地域総合文化研究所紀要』4、24-49
- (1998)「青森県保健医療社会史における青森県農村医学会の位置」『地域総合文化研究所紀要』10、25-69
- 川上武(1969)『医療社会化の道標』勁草書房
- 川上武・上林茂暢(1973)「地域保健の先駆者 小宮山新一(1905～67)」『公衆衛生』37(1)、48-49
- 川内淳史(2011)「広区域単営医療組合の存立形態と地域

- 社会——青森市・東青病院を中芯に」『大原社会問題研究所雑誌』630、45-61
- 柿崎勇治(1940)『青森県大人名録』東奥日報社
- 川崎文男(1935)『昭和更生青森縣市町村大観』東奥日報社
- (1937)『青森縣人名録』東奥日報社
- 丸山博(1967)「小宮山新一君を偲ぶ」『医学史研究』24、30
- 佐藤京子(1989)「弘前市立病院の歩み——地域住民の健康を守って」木村宏子編『四十周年記念誌』日本看護協会青森県支部、191-193
- 小宮山新一(1939)「農村に於ける母性の勤労と乳幼児保護」『児童保護』9(6)、24-28
- (1943)「農繁期の母子保健への影響」『健民』7(5)、46-52
- 黒川泰一(1975)『沙漠に途あり——医療と共済運動50年』家の光協会
- 長野県厚生農業協同組合連合会編(1978)『長野県協医療運動史』同会発行
- 野津謙・池田輝雄・天野光武・松岡精二・近藤忠雄・林義雄・羽仁説子(1938)「児童の健康のため学校衛生の問題を如何にすべきか」『婦人之友』32(4)、186-198
- 小野淳信(1975)『学校医之先達』弘前市学校医会
- (1997)「学校保健・学校医の歩み」記念誌編集委員会『新制弘前市医師会創立50年記念誌』弘前市医師会発行
- 産業組合中央会(1936)『第三回医療利用組合調査 昭和十年度』同会発行
- 高木武夫(1925)『弘前教會五拾年略史』日本メソジスト弘前教會
- 「新編弘前市史」編纂委員会編(2007)『新編弘前市史4』弘前市企画部企画課
- 鈴木晃仁(2005)「近代日本におけるジフテリア疾病統計の分析」『三田学会雑誌』97(4)、37-53
- 田澤多吉(1943)『明治以来弘前市醫史』
- 東奥日報社編(2002)『青森県人名事典』東奥日報社
- 東京大学医学部付属病院分院閉院記念事業実行委員会(2001)『東京大学医学部付属病院分院のあゆみ』同委員会発行
- 津川武一(1989)『オロシアおろし 藤田民次郎の一揆』民衆社
- 滋賀俊秀編(1979)『東京帝大柳島セツルメント医療部史——医学生の前社会運動黎明期の記録』新日本医学出版社
- 高橋政子(1995)『いのちをみつめて』ドメス出版
- 田中清玄・大須賀瑞夫(2008)『田中清玄自伝』ちくま書房
- 若月俊一監修、「佐久病院史」作製委員会編『佐久病院史』勁草書房
- 全国厚生農業組合連合会編(1978)『協同組合を中心とする日本農民医療運動史』同連合会発行
- 全国協同組合保健協會編(1941)『農村医療現地報告』同会出版部